

氏 名	長瀬 真実子
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第632号
学位授与年月日	令和5年7月 5日
審 査 委 員	主査 教授 新野 大介
	副査 教授 山崎 修
	副査 准教授 中山 健太郎

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

Interleukin (IL)-33/suppression of tumorigenicity 2 (ST2) 経路は炎症性疾患に関与し、腫瘍微小環境では腫瘍の進行を促進するが、抑制性に作用するとの報告もあり、生物学的意義が十分に解明されていない。腭癌は予後不良で、術前補助療法の有効性が近年報告されているが、効果予測因子は明らかではない。本研究では香川大学医学部附属病院で2009年～2018年の間に、術前化学放射線療法後に外科的切除を施行された浸潤性腭管癌患者76名を対象として、ST2の腫瘍内発現と臨床病理学的因子、予後との関連性を後方視的に検討した。腭癌組織から組織マイクロアレイを作製し、抗ST2抗体で免疫組織化学を行った。腫瘍細胞の細胞質にST2発現が認められ、陽性細胞の割合と染色強度を用いてスコア化した。スコアの間接値をカットオフ値として、カイ二乗検定やログランク検定で統計学的に解析した。結果としては、腫瘍サイズが大きい（2cm以上）症例、リンパ管侵襲陽性の症例、治療効果の低い症例において、ST2発現が有意に高値であった。ST2発現と疾患特異的生存率に関連性は認められなかったが、ステージI期ではST2発現症例において無病生存率が有意に低下していた。以上から、術前化学放射線療法後の腭癌では、ST2発現が腫瘍促進性に働く可能性が示唆された。本研究は腭癌におけるST2のバイオマーカーとしての意義を解明する糸口となる成果で、学術的価値が高く、学位授与に値すると判断した。